

第 25 回長崎県央看護学校看図アプローチ研究会開催 @諫早

8 月 20 日、長崎県央看護学校にて第 25 回長崎県央看護学校看図アプローチ研究会が開催されました。同校の教員はじめ、長崎県内、福岡県、県外からも申し込みがあり、途中の出入りも含め 20 数名の参加者が濃密な“看図の時間”を過ごしました。本会は「25 回目」とされています。しかし実際にはカウントに入るかどうかという会もたびたび開催されているということで、熱心に継続的な取り組みがなされています。



長崎県央看護学校

今回は「看図アプローチと創造性の育成ー創造は無関係の関係から始まるー」がテーマに掲げられました。「創造」は、何かを創り出すこと、新しい意味を生み出すことはもちろん、人と人との関係にもいえることです。「創造」は例えば“教師と学生”という人の関係のみならず、“学ぶことと看護”という関係にもいえることです。一見将来に関係がないと思われる学習であっても、やがて臨床の現場（職業）に関連づいていく学び。そのような学びも必要なのではないのでしょうか。副校長円能寺貞子先生の言葉をお借りすれば、「他者の意見を受け入れることや、他者を尊敬する力といったものが自然に身についていく」。そうした本質的な結びつきを、看図アプローチは可能にします。

午前中のプログラムは「ポジティブきゅうちゃん」を用いたアイスブレイク（筆者担当）に始まりました。単なる自己紹介ではなく次の学習につながるような時間にすることを目標に実施しました。参加者の間では、きゅうちゃんを誰に見立てて見るのか、こちらに来るのか・あちらに行くのか、どうやって行き来するのか等々、様々な視点からの読み解きが共有されていました。アイスブレイクにも看図アプローチの読み解きの理論が隠れています。そのため、参加者たちはお互いのことを知り合いながら、自然にその理論にふれていく時間となりました。



アイスブレイクの様子

（左：使用したポジティブきゅうちゃん）



その後の鹿内信善先生のワークショップでは最新のビジュアルテキストが呈示され進められました。定食の写真を用いた読み解きでは「なぜ？」と問わずに「なぜ？」を引き出すコツにもふれられ、実際の授業場面を想定したお話がたくさん聞かれました。「なぜ？」はつい多用されがちです。何度も問われると学習者は飽き飽きしてしまいます。そんな



「定食」の写真を使ったワークショップの様子

らないためには学習者が「～なので」「～ので」が言いたくなる発問とビジュアルテキストが不可欠です。看图アプローチはそれ自体が「～なので」「～ので」が言いたくなる構造をもった学習法です。1回のワークで「～なので」「～ので」が発信できるようになるのは難しいかもしれませんが、何度か繰り返し鍛錬することによってより確かに身につけていきます。

午後のプログラムは長崎県央看護学校の先生方のワークショップで始まりました。杉本真紀先生・中村伊織先生・西村優子先生が、それぞれ撮影した写真を2枚ずつ用いたビジュアルテキスト読解授業を展開されました。一見すると「無関係」である2枚の写真ですが、意外性のある発問によって見事に「関係」づけられていくような内容となっていました。関係づけることが難しい問題は、グループのメンバーや全体での共有によってスッキリ感を得ていきました。学校として看图アプローチを導入した先駆である長崎県央看護学校。「新人です」という先生もいらっしゃる中、ワークショップは全く違和感なく、さらなる発展を予感させるものでした。



長崎県央看護学校の先生方によるワークショップの様子

最後のプログラムは再び鹿内先生から、シンプルな絵図から深い読みを誘うもの、法律に関するもの、トップダウンの考え方等、普段の授業にいかせる考え方や教材が示されました。参加者の中には、読み解きの中で芽生えた自身の心の動きに向き合い、その深層心理や、学生に呈示する上での留意点について深く考察される方もいらっしゃいました。



シンプルな絵図を使ったワークショップの様子

質疑応答の時間は、いつしか各グループでのリフレクションタイムとなりました。司会の田中伸子先生や講師を務めた鹿内先生が何かはたらきかけたわけではなく、自然とそのような時間に突入し、あっという間に1時間が経過していました。各グループ思い思いにディスカッションしており、その中でさらに「納得解」や「スッキリ感」を得ていた様子でした。参加者全員が主体的・協同的に、深い学びを実現していました。

このような会にできたのも長崎県看護学校が独自にこつこつ研究活動が続けてこられたおかげだと思います。今後は、長崎県内の学校や県外の学校、その他の機関とも連携した新たな“県央モデル”の発展が期待されます。



集合写真

文責 石田ゆき